

空の瞳／クリスマス・コンチェルト

1

「修学旅行は、ずいぶん楽しかったようですね」

約十日ぶりに顔を合わせた相手の、第一声がそれだった。部室の外に吹き荒れる風よりも、まだ冷たい響きだ。予想はしていたものの、瀧川は文字通り、その場で凍りつくしかなかった。

「……あのなあ。何を聞いたか知らないが、あれは……」

くたくたと説明を始めた瀧川をもはや視界に入れようとせず、陸上部の黒いジャージを着込んだ悠哉はスタスタと歩いて部室を出て行く。

自分のジャージを掴んで羽織りながら、瀧川は仕方なくその後を追った。

「なあ、どんな噂になってる？」

恐る恐る聞くと、悠哉は運動靴の紐を直しながら淡々と答える。

「……いろいろありますけど。瀧川先輩と山崎さんの部屋から、夜通し色っぽい声が聞こえたとか、聞こえなかったとか。帰りの新幹線で、山崎さんが瀧川先輩に『秘密の手紙』を渡していたのを見たとか、見ないとか……」

「……………」

『秘密の手紙』と来たか、と瀧川はうなだれる。実際それが何であったかは悠哉には言えないので、その件の言い訳は諦めることにする。

かといって、『色っぽい声』疑惑を説明するのも、至難の業だ。何せ流れている噂は、ただ一点を除け

ば、ほとんど真実なのだから。

ただ一点の、最も重要な事実。……それはあの日、山崎桂と一緒にいたのが、瀧川ではないという点だ。

「笹辺。無駄だとは思いますが、一応言っておく。山崎とは何もない。おまえにとっては興味もない、どうでもいいことだろうが、とにかく何でもないんだ」

この言い訳は二度目だな、と瀧川は思い出す。自分が逆の立場だったら、はっきり言って全く信用できない。そう考えて、さらに落ち込んだ。

深々とため息をついていると、突然、靴を直していた悠哉が肩を震わせて笑い始めた。何だ何だと目を丸くすると、悠哉は顔を上げ、さらに笑い続ける。

「……ホント、山崎さんの予想通り」

笑いながら悠哉が漏らしたその一言に、瀧川は眉をひそめた。ようやく落ち着いた悠哉が、それでもちょっと涙目になりながら事情を説明する。

「昨日のうちに、山崎さんが話しに来たんですよ。とりあえずいろいろ噂が流れると思うけど、瀧川は全く関係ないことだからって。で、そのうち瀧川がウダウダ言い訳しに来るだろうけど、それは全部本当のことなので、あんまり苛めないでやってね、だって。……先輩、完全に山崎さんに行動パターン読まれていますよ」

再び笑い始めた悠哉を無然とした表情で睨んで、瀧川は腕を組む。笑われているのが自分だという事実は気に食わなかったが、悠哉がこんなに笑うのも珍しい光景だった。とりあえず、機嫌は悪くないらしい。

「それで、『秘密の手紙』の内容は聞いたか？」

「内容？ ……いえ、別に」

首を振った悠哉に、瀧川は内心ホッと胸を撫で下ろす。悠哉は訝しげに眉根を寄せたが、瀧川はごまかすように手を振ってその場を離れた。



その次の週は、期末試験前のため部活は休みだった。そして試験が明けてからも、悠哉は陸上部の練習には滅多に顔を出さなくなった。十二月下旬に催される学園のクリスマス祭で、ピアノを担当することになったからだ。

クリスマスコンサートには基本的に、オーケストラ部や声楽部のみが参加するのだが、奏者が足りない年は、ある程度 楽器を弾ける者は容赦なく駆り出される。

今年は、まともにピアノを弾ける人間がたまたま他におらず、リハーサルやら何やらで、悠哉は忙しいらしかった。

清鳳のクリスマスコンサートといえば、近隣でもかなり人気の高い催しだ。一枚五百円のチャリティーチケットは、発売されるとすぐに売り切れ、清鳳の生徒でも少し出遅れると席を取れない。

「瀧川。浮かない顔だな」

なぜか嬉しそうに顔をのぞき込んで来るのが、同じクラスの山崎桂だ。

いまだにきわどい噂が消えないため、あまり話しかけるなどってはいるのだが、そんな忠告は守られた試しがない。

「それでも、ない」

不機嫌にそう答えると、桂はクスクスと笑った。笑いながら、ひらりと一枚の紙片を瀧川の前でかざす。

「これ、おまえにやる。クリスマスプレゼント」

「何だ？」

受け取って、印刷を確かめた瀧川はえっと目を見張った。

「クリスマスコンサートのチケット？ もう売ってないだろう、これ」

コンサートは、明後日に迫っている。チケットはとっくの昔に完売したはずだ。どうやって手に入れたと問い詰めると、桂は肩をすくめた。

「オーケストラ部の元部長に、頼んだらくれた」

「元部長って、それ……藤元さんか？」

呆れたように、瀧川は呟いた。三年の藤元と言え、桂に惚れているらしいと噂のある生徒の中の一
人だ。今や入手困難のチケットを易々ともらって来るあたり、その噂もおそらくガセではないの
だろう。
しかも、中央の、五列目。狙ってもなかなか取れない席だ。

「……藤元さん、絶対、おまえが来ると思って渡したんだろうに」

「……コンサートには、ちゃんに行くよ。俺、場内アナウンス頼まれてるから」

にっこりと答える桂に、悪びれた様子は少しもない。

オーケストラ部元部長に激しく同情を覚えながらも、瀧川はそのチケットをありがたく受け取った。

クラシックコンサートなんて、柄じゃない。それはわかっていたが、悠哉の弾くピアノは嫌いじゃな
かった。

悲しい、透明な音がする。それが自分のための音ではないと知ってはいたが、もう一度あの響きを聞
いてみたいと、素直に思った。